生涯一捕手
野村克也の
人生哲学とは

作　岸塚　康子

　私は野村ファンではありません。何しろサッチーが容認できませんから。 しかし野村さんは、野村流の人生哲学を構築しました。名曲は心を癒しますが、生き方、考え方は変えません。しかし古来から伝わる名言、格言、諺には真理があります。温故知新=古きを暖め新しきを知る、野村さんはサッチー問題のときに草柳大蔵氏が野村さんに送った。故事の生涯一書生から生涯一捕手を自分に課しました。自分流にアレンジするのは良くないという人がいますが、私は自分流にアレンジすることこそが血となり肉になると考えています。皆さんも自分なりの哲学を構築して、子曰く（しのたまわく）を山田太郎さんなら山田太郎曰くとして自分なりの人生哲学を構築してみたら如何でしょうか。大きく言えば、哲学無き世に哲学をという事です。

今年の五月に電子書籍・アジャスターという小説で作家デビューした岸塚康子です。現在21歳です。日課として毎日、ブログを更新しています。是非、お立ち寄り下さい。

HP　　　　　http://homepage3.nifty.com/yuukirinrin/

勇気凛々　http://yuuki-ran.cocolog-nifty.com/blog/

「しおりをつける」をクリックすると目次にしおりのマークが出ますので、その後は、そこをクリックして貰えれば引き続き読む事ができるので読みやすいと思います。

知るを楽しむ 野村監督編を見て **2008/4/5**

NHKの知るを楽しむという番組で2/6から4週連続で野村監督の半生を放送していました。人生の歩き方というタイトルで副題に逆転の発想とも書いてありました。私は野球を良く知りませんが録画して何回も見ました。
番組の中で「野球とは確立と運と流れ」であると語っていました。楽天の監督となったときには「無形の力」というチャッチフレーズを打ち出しました。確かヤクルトの監督の時はインポートデータ（ID）野球を旗印にしていましたが「無形の力とは観察して洞察する力判断して決断する力だ」と言っていました。
世の中には有形の力と無形の力があると思います。例えば無口で愛想がなくて仏頂面の店主でも、作ったラーメンが美味しいなら客がつきます。これが味わえば分かる有形の力です。でも手に取れない目に見えない勝利の方程式は味あわせる訳にはいきません。正に「確立と運と流れ」の組み合わせです。何故私が野村監督の話に共感を得たかというと今まで投資の本を色々と読みましたがしっくりくるものがありませんでした。でも、この言葉を投資に当てはめると「投資とは確立とうんと流れである」と思い至ったのです。それには無形の力が必要であり、観察して洞察し判断して決断する事が必要だとこれも戦いの世界に生きる人の標語として強く感じました。
自らのことを「一流でない」「スランプという言葉は超一流の人が使う言葉であって未熟なものが軽々しく使うのは良くない」と称していましたが45歳までキャッチャーとして活躍し3017試合

出場という誰にも破られていない記録を持つ戦後初の三冠王。捕手は試合を動かす脚本家でもあるサインを出す指一本で試合が動くと自身の著で綴っています。生涯一捕手を貫いた野村監督は謙虚な人でした。何故、こんな謙虚な人の奥さんが沙知代という人なのかは理解できませんが戦い抜いてきた人の美学と見識は投資家にとって学んで損はないと考えます。

野村監督の半生をおった番組、知るを楽しむの感想を記事にしたところ多くの人が読んで下さった様なので、もう少し感じたところを綴りたいと思います。
野村監督におきた不思議な出来事を二つ記します。
野村少年は極貧の家計を救うためにプロ野球の選手を目指しました。しかし無名高校の弱小チームでは道が開けません。そこで南海ホークスの入団テストを受けることにしました。最初のテストは苦手な遠投でした。チャンスは２回　合格なら白旗、不合格は赤旗です。渾身の力で第１球、規程に届かず赤旗。最後のチャンス、第２球を投げようとしたその時、審査員の人が近づいてきて「前いけ前いけ」と小さな声で手振りしました。その言葉に甘えて野村少年は5m程フライングして投げたところ合格の白旗が上がったそうです。野村監督自身、この人が居なければ南海に入れないのですから本人曰く「恐ろしい」という言葉で奇蹟を表現していました。つまりこの審査員が居なければ戦後初の三冠王・野村選手は誕生しなかったのです。
更に不思議な事が続きます。
無事、入団をし希望通りキャッチャーのポジションについた野村監督ですがキャッチャーとは名ばかりで来る日も来る日も球を受けるだけの「カベ」と呼ばれる存在でした。一年たったある日、呼び出された野村監督は「来年は契約しない。クビだよ」と突然告げられました。「僕、何もやってません。プルペンでタマ受けただけですけど」と言うと「この目はプロの目だ。お前に素質は

ない。無理だ早く帰れ。早い方がいい。その方が俺を感謝する日が来る」と返されてしまいました。
その時、野村監督の脳裏に田舎の母親の顔が浮かびました。貧乏にもかかわらず自分の夢を追わせてくれた母。自らの大学進学の夢を断ってまで高校進学を後押ししてくれた兄。たった一年で帰っては恥ずかしくて町も歩けない。「お願いです。給料ゼロで良いですから、もう１年だけやらせて下さい」と涙ながらの訴えました。・・・緊張の10分間。何とか野村監督の訴えは通じ退団は免れました。
戦後三冠王と言えば野村監督の他に王監督そして中日の落合監督ですが実は落合監督も不思議な体験をしています。プロボーラーを志していた落合監督がプロテスト受験の際にスピード違反で捕ってしまいました。すると罰金を支払ったことで受験料が払えなくなり受験できずプロボーラーの道を断念したのです。
私が大変興味深いのは強運な人のみに備わっているのか小説でもこうはいかないだろうという奇跡的な幸運が起こる点です。テストを受ける少年は野村監督だけではなかったのに野村監督だけにフライングを示唆してくれた審査員がつくという確率は天文学的なものではないのでしょうか。落合監督にしても、あと少しのお金があればプロボーラーの試験をうけ合格していても不思議はありません。スピード違反で捕まることも珍しければ丁度その時に手持ちがなかったというのも幸運すぎる出来事です。これを偶然と思う人もいるでしょうが私は世に偶然は一つとしてなく全てが必然だと考えていますので、これは成るべくしてなったのだと考えます。そして、そんな人の人生の道の流れには小石や間違った

道があっても不思議な力で正道に導かれる。異論もあるでしょうが私は必然である事例だったと思いました。

野村監督は実戦で心理学的にも戦略を練りました。ボールがくると思わせてストライクにする方法。それはピッチャーに「おーい、あってるぞ〜」と声を掛け、それを聞いたバッターはギリギリのボールを要求した野村監督の思い通りになっていることを思わず叫んでしまったと思い、またギリギリのボールを放ってくると思わせて実はど真ん中に投げさせる戦法でした。

また、他球団の選手の私生活などの情報を仕入れて、集中力を乱す策「ささやき戦術」を使うようになったのは有名な話です。
でも、この戦術は100%通用した訳ではないようです。この戦術が通じなかった人達が4人居ます。大杉勝男さんに囁きかけると「うるさい」と一喝され、張本勲さんには空振りと見せかけてバットで殴られ、王貞治さんは集中のあまり話を全く聞かず、長嶋茂雄さんに至っては「昨日はおねえちゃんと楽しくやったそうじゃないか」というと「いや、昨日は真っ直ぐ家に帰ったよ」と平然と返され、ある時は違う話を持ちかけられたり、アドバイスと勘違いして本塁打を放たれたりしたと野村監督自身が言って居ますが、長嶋茂雄さんには全く囁きが通じなかったようです。
そこで、長嶋伝説

I live in TOKYOを過去形にしろと、言う質問に
「I live in EDO」

「代打！後藤！」しかし後藤は代走で出ていた。

清原のバッティングは「シャープが鋭い」

「失敗は成功のマザーです」

「打つと見せかけてヒッティングです」

勝負の世界には常に天敵がいるという何よりの証明でしょう。ちなみに野村監督と長嶋さんは同じ歳です。正に向日葵ような長嶋さんとひっそりと咲く月見草のような野村監督との存在証明のような出来事です。

　野村さんの人生の歩き方が再放送されていましたので、未だ書いていなかったことを書きます。
努力と忍耐というカテゴリーで記します。
野村さんは、生涯一捕手。「捕手は試合を動かす脚本家でもある。サインを出す指一本で試合が動く」と『無形の力』という著書でも書いているように、キャッチャーというポジションをしたかったのですが致命的な欠陥がありました。それは肩が弱いということです。今と違って当時は筋力トレーニングはタブーとされていた時代に、一升瓶に砂を詰め（恐らく当時はダンベルという物が無かったのでしょう）これをダンベル代わりにして次のテストの時に合格して正捕手となっていきます。してはいけないということをしたのですから選手生命を賭けていた事になります。
　次に観客からカーブの打てない野村と野次られます。相手チームのある観客には「次はカーブのお化けが来るぞ」といわれるほどでした。鶴岡監督からも「お前は二流は打つが一流が打てないな」と嫌みを言われます。夢にまで出てくるカーブ。その時のボールはとても大きくそれが自分に当たってくる夢を何度も見たそうです。努力の人野村さんは毎日カーブを打つことを考え抜いた事でしょう。そんな時、アメリカの最後の4割打者、テッド・ウイリアムズの本の中で「ピッチャーはサインが決まれば何を投げるか決めている。 その時小さな変化が起きるはずである」という光る一行がありました。その事から「癖があるはず」と閃きました。相手のピッチャーのピッチングフォームを研究し投げ

る前の癖を発見して、どんなボールが来るかを前もって考える事で克服していったのでした。どうしても、稲尾さんだけが読めなかったそうです。そこで、まだビデオのない時代に、友人に頼んでネット裏から16ミリを撮ってもらい、それをすり切れるほど見て稲尾さんの癖を研究しました。そしてやっとインコースを投げる時のボールの握り方の癖を発見したのです。急に野村さんが打てるようになったので、「なんでや」と稲尾さんも首を傾げるほどでした。　しかし、「オールスター戦の時に、杉浦の馬鹿が16ミリ回しているぞ、と稲尾にいってしまった」と野村さんは語っていました。それから稲尾さんは逆を付いてくるようになり、野村さんと稲尾さんはお互いに凌ぎを削って行きます。でも野村さんは稲尾さんとの対決は楽しかったと話していました。

　野村さんは南海入団当初、「カベ」といわれたそうです。「カベ」というのは壁です。つまり、名前では呼ばれなかったそうです。壁にボールを投げると跳ね返ってくるその役割をしていただけの捕手ですから、名前など覚える必要もないという扱いを受けたのです。忍耐の日々だったのでしょう。

　「野球とは」という質問に対し「どう考えてみても野球は頭のスポーツだ」と言っていました。野球ほど間があるスポーツはありません、その間を、ボーっとするか考えるかで違ってくる。ピッチャーの癖を掴んで球種が読めないより読める方が打てる確率が高い。黙ってボールを受けているより、バッターに独り言を言っているように聞かせてバッターの心理を匠に操る戦術を考えました。そう言えばイチロー選手も外野で「どうしたら打てるか。どうしたらより守れるか」をいつも考えていると言っていました

。
　今も昔も変わらないでしょうが学校教育は暗記することが99%です。でも実社会は考えるということが重要です。覚えること暗記に長けている人が一流大学から官僚に流れ、その延長線で頭が良いとされています。
戦後から現在に至る政治家が３流或いは４流といわれる所以ではないでしょうか。覚えること暗記も努力ですが見えないことを開発する頭が本当に頭のいい人だと思います。今流に言えば、過去ログに長けている人は勉強の頭、未来が見えるが人が頭のいい人。所謂官僚・政治家に先見の名があるとは思えません。